國にはおはせぬ相なりと申、貞信公をばあはれ日本のかためやなかくよをつぎかどをひらく事、たゞこのとのと申たれば、われをあるが中にさえなくてんごくなりとかくいふ、はづかしきこと、おほせられけるは、されどその儀にたがはず、かどをひろげ榮花をひらかせ給へば、なをいみじかりけりと思ひ侍りて、又まかりたりしに、小野宮殿おはしまし、かば、え申さずなりにき、ことさらにあやしき姿をつくりて、下臈のなかに遠くゐさせ給へりしを、おほかりし人のうへよりのびあがり見奉りて、およびをさして物を申しかば、なに事ならんと思ひ給へしを、のちにうけたまはりしかば、貴臣よと申けるなり、さるはいとわかくおはしますほどなりかしな、

〔源氏物語一桐壺〕そのころ、こまうどのまいれるがなかに、かしこきさうにんありけるを、きこしめして、宮のうちにめさんことは、うだのみかどの御いましめあれば、いみじうしのびて、このみこ○源氏を、鴻臚館につかはしたり、御うしろみだちてつかうまつる、右大辨のこのやうにおもはせて、ゐてたてまつる、相人おどろきて、あまたゝびかたぶきあやしぶくにのおやと成て、帝王のかみなきくらゐにのぼるべき相おはします人の、そなたにてみれば、みだれうれふることやあらん、おほやけのかためとなりて、天下をたすくるかたにてみれば、またその相たがふべしといふ、○中略みかどかしこき御心に、やまとさうをおほせて、おぼしよりにけるすぢなれば、いまゝでこのきみを、みこにもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと覺しあはせて、無品親王の外戚のよせなきにてはたゞよはさじ、わが御世もいとさだめなきを、たゞ人にておほやけの御うしろみをするなん、行さきもたのもしげなること、おぼしさだめて、いよ〳〵みちみちのざえをならはさせ給ふ、

〔花鳥餘情一桐壺〕やまとさう　藤原仲直が光孝天皇を相したてまつり、廉平が、高明公を相せしは、みなやまとさう也、